

# Anticholinergic Cognitive Burden (ACB) スケール

国立長寿医療研究センター泌尿器外科

吉田正貴, 西井久枝, 野宮正範

## はじめに

日本では高齢社会が急速に進行しており、日本老年医学会および日本老年医学会からは現在の65歳以上の高齢者の定義を「75歳以上」に引き上げるべきとの提言も出されている<sup>1)</sup>。このようななかで高齢者に対する薬物療法のガイドラインなどが発刊され、高齢者の薬物療法へ注意が喚起されてきている。下部尿路機能障害において、特に過活動膀胱（overactive bladder；OAB）に対しては薬物療法が第一選択治療であり、そのなかでも抗コリン薬（抗ムスカリン薬）が多用されてきている。抗ムスカリン薬は抗コリン負荷を増長させ、認知機能などへの影響も大きい。この抗コリン負荷を評価する目的で作成されたスケールの1つが、Anticholinergic Cognitive Burden（ACB）スケールである。本稿ではACBスケールについて概説し、このACBスケールを用いて、最近我々が行った研究についても紹介する。

## 超高齢社会におけるOABとその薬物療法

OABの40歳以上の男女の有病率は12.4%と報告されており、現在の人口当たりで計算すると1,000万人を超える方が罹患していることになる<sup>2)</sup>。また、全国約680件の調剤薬局の処方箋データから、OAB治療薬を服用されている患者の平均年齢は74.0歳であるとの報告があり<sup>3)</sup>、多くの高齢者にOAB治療薬が処方されている現状である。

そのようななか、日本老年医学会から『高齢者の安全な薬物療法ガイドライン』<sup>4)</sup>が発刊された。このガイドラインは75歳以上の高齢者および75歳未満でもフレイル～要介護状態の高齢者で、慢性期、特に1ヵ月以上の長期投与を基本的な適用対象としている。また、有害事象増加の二大要因は薬物動態の加齢変化に基づく薬物感受性の増大と、服用薬剤数の増加であることが記載されている。このなかでは、特に慎重な投与を要する薬物のリストと開始を考慮すべき薬物のリストがあげられ

Masaki Yoshida（部長）、Hisae Nishii、Masanori Nomiya（医長）